

大震災・噴火前に避難可能 地象の電磁気観測システム

<超高感度地震計>の「地震警報」は、

危険な直下型地震で、間に合わず、

<GPS>利用の「地殻変動観測」も、

確実な予知情報は無理でした。

日本地震学会や有識者会議は、地震予知は大変困難と発表！

しかし

当「電磁気」観測網は、**正しい予知情報**を発信中！

DangerNews & JYAN研 会長 國廣秀光

2 3 年前

阪神大震災は誰も予知出来ず

1 0 年前

(当JYAN研)本格的電磁気観測を開始

8 年前

東日本大震災初電磁気観測！

- 1 0 年前
- 旧来からの地震計を、超高感度のデジタル観測機に交換したが大地の微細動を観測しても、前兆は判らなかった。
- 地震研究予算に、電磁気観測や宏観異常現象は無視された。

阪神大震災の前兆証言と電磁気現象

- ・震災の後、地震前兆現象を市民から聞き取り調査
- ・1159件の証言中、電磁気の前兆現象が64件
- ・当JYAN研は、ハム第一級で電磁波に強く、現用無線機を活用
(地震学者は電波・無線や電磁気関係の知識が乏しかった。)
- ・それで、当JYAN研が電磁的予知で独走状態になった。

全電波を、実際に観測して調査

- ・地震予知を確実にする為、
0～5 G迄、全周波数の観測に挑戦した。
- ・10年で、ようやく観測に適した周波数が判った。
しかし
- ・異常と、電磁現象の因果関係を解読するのに20年を要した。
(地震学者には、電磁観測の根本が殆ど判らなかった。)
(他の電波観測 電離層利用 = ぼやける 衛星利用 = まだまだ)

観測1 地下からの電磁波観測

- ・アースからの電磁(気)波をすべて観測し、その原因を探求
- ・岩石や火花実験で電磁波の特徴を確認
- ・地下深くから電磁波が出てくる理論を分析し、学会で発表
- ・超低い周波数は、特別な伝搬がある事も発表
(アース伝播の発見は、JGU等の学会でも発表)

結局、地象は地表観測が最も良く判るのです。

観測2 FM放送は水平方向探査に

- FM放送は、出力電力が一定、24時間放送、電波の異常変化を観測するには最適であった。（観測網の周波数に決定）
- インターネットを利用した先端的観測装置を開発（11年前）
(ライブデータで24時間の観測網を敷いた。)
- 地震前の電磁波の異常と、地震との因果関係を追求
(電波ミラージュ発見=地震学会発表)
- 異常電磁波の方向をクロスチェックし震源地を探索(新聞発表)

観測3 電離層利用は広域探査に

- 短波帯も、地震の前に電磁波異常あり ハムには常識！
- 広域観測は、外国の観測も可能、世界的なネット構築へ
- 電離層等の、電波伝搬理論や新説理論も展開中
(論文数本執筆中)

電磁波と地震の異常経験則(10年間)貴重

- 電磁波の異常と、地震と潮汐や雷、無線通信及びノイズやパルス等、その原因と因果関係を探求し、区別が可能になった。
- 潮汐の変動は電磁波異常と同期、相関関係を証明
(潮汐と電磁波異常の同期現象を発見＝学会にて発表)
- 地震予知に時間的予測の導入が可能 (最新未発表)

予知 3 原則、データ処理と自動計算要領

- ライブ観測データを、自動計算処理 異常ピックアップ可能
- 震源地は、異常レベルの同心円の中心
- いつは、同心円の大きさから、震源の深さを計算可能
解析パターンから発生時期を特定可能
- どれくらいのは、異常の大きさから、異常レベルと経験則から、地震の大きさが判定

いつ、どこで、どれくらい予測確率

- 3種観測法と経験則を重ねて照合可能
- FM放送波の異常から、震源地のクロスチェックが可能
- 過去10年の地震観測データは、経験則として重要(他に無し)
- 上、中、下の観測を統合
経験則と照らせば85%以上の確率を確保
- 詳細分析で、時間的予測も可能となる。(どこにも無い技術)

日本地震学会や地震予知有識者会議は
正確な地震予知はできないという。しかし

- 当該、電磁気観測なら予知可能（学会発表済み）
- 地震学会は、御用学会
地震予知は、電磁気観測網を敷設すれば、高信頼の情報発信が
「できて当たり前」の時代となっているはず
しかし、未だ
- K庁の週間天気予報は、確率は35%前後と低迷
- 当電磁観測では「85%」以上確実で、信頼される情報

観測網の敷設と情報処理センター

- ・観測網は、正解率90%以上を目指すため10Kmメッシュ自動処理には管理者の再チェックが必要
- ・全国の観測網敷設は、2400局（市町村複数）以上
一次600局（県別）、二次1200局（県地方別）
- ・広域観測網は拠点観測（県別）から海外（重装備）へ進める
- ・24時間体制の情報処理センターを整備、情報配信には専門の部署が必要

情報解析と危険情報の配信価値

- ・地震予知情報は、全国民（世界同様）が必要
 - ・情報価値は次第に膨らみ、危険情報は最も価値が高くなる。
 - ・地震に噴火等、命の安全情報は、別格の情報である。
-
- ・危険情報の配信には規定が必要である。
 - ・情報は信頼度に応じて、その対価も格が上がる。

地震・噴火の予知情報と必要度

- ・地震や噴火は、マグマや地象の観測から、共通部分も多く電磁観測が適している。他に、宇宙からの影響もある
- ・地象の危険情報は、世界的に渴望されている情報
- ・危険情報は、情報が正確にならない限り、国の予報等は困難で、民間の情報機関が発表するのが適当である。
- ・危険情報は、そのデータと共に確率を付す事が原則
- ・地象危険情報が出ると、より詳細な情報が必要となる。

求められる災害危険情報

- ・災害の危険情報は、本当に必要な情報で、価値は計り知れない。
- ・地震・噴火等の地象観測は、気象以上に重要な観測であり日本や世界で、最も必要且つ重要な情報となる。
- ・地象の警報は、気象予報士と違って、勝手な判断で、間違った発表ができない仕組みにする。
- ・危険情報は、生活情報として生かされるようになる。

資料編 1

- ・ホームページ(概要解説HP)
 - (1) 地震予知研究所 現観測網の予知情報を掲載
 - (2) 地震予知安全ネット 地震安全に関するHP
 - (3) 地震電磁波研究所 地震と電磁波の関係を掲載
 - (4) JYAN研究会 研究会のホームページ(旧来第2版)
 - (5) 地震予測観測網 観測網専門のホームページ(旧来)
 - (6) 他に広報頁や、安全勉強頁などがあります。

資料編 2

- ・学会発表とその内容 & ビデオ等
 - (1) 2009年京都大学 日本地震学会 地震電磁波の観測法
 - (2) 2011年静岡大学 日本地震学会 電磁波異常理論展開
 - (3) 2015年JGU学会 FM波の異常解析と潮汐同期論発表
 - (4) 2017年JGU学会地震学会他熊本地震のPerfect観測発表
 - (5) 新聞 産経新聞 2回 月刊CQ誌 6回 地方紙 3回
 - (6) 学会 日本地震予知学会の会報にJYAN研が紹介される
 - (7) 東京晴海ハムフェアー展示 6回、他講演多数

資料編 3

- 各活動編

- (1) 1995年1月地震と電磁波の研究開始（消防救助で事後はダメ）
 - (2) 地震予知アマチュアネットの発足（電磁波なら前兆がある）
 - (3) 地震予知観測網 大分ネット発足（観測網の必要性）
 - (4) JYAN研究会観測網 約50局（全国に協力者が出でてきた）
 - (5) 新聞、月刊誌、週刊誌など（フェイク予知で困っている）
 - (講演) プロジェクト資料
 - (展示) ハムフェア、関ハム、西ハム、他
 - (他?) 何故?ここまでやるの?と聞かれます。
- 答え 前職が消防で、命の大しさを体感しているからです。

地震・噴火等「危険情報センター」 計画 DangerNews (社)

- ・全国に2400ヶ所の電波観測網敷設
- ・全国8地方に広域重点観測網敷設
- ・全国50ヶ所に府県観測網敷設（噴火観測網）
- ・アジア・オセアニアに広域観測網を設置
- ・地震・噴火等危険情報センター開設

東南海 3 2万人、直下型大地震 = 数万人
富士山等大噴火 = 数百万人 救いの神求む

- 当電磁気観測網の敷設資金 スポンサー募集
早く電磁気の地震噴火観測網を作りたい。（会社）
 - 研究仲間募集 ボランティア員 募集
 - 研究援助者募集 資金的援助者 募集
 - 地震噴火等で亡くなる方を救ってくれる方を求めています。
 - JYAN研國廣に連絡下さい。 jyanken@oct-net.ne.jp

873-0503 大分県国東市国東町鶴川1737 TEL 0978-72-2643